北洋船団
女ドクター航海記

田村京子

集英社

著者　田村京子
1940年中国・長春生まれ。東邦大学医学部卒。東邦大麻酔科助教授。スウェーデンのカロリンスカ大に留学。都立駒込病院麻酔科医長を務めた。1982年に北洋サケ・マス船団、1984年に南氷洋捕鯨船団の船医となる。実績をかわれて1985年6～7月、船員制度近代化実験船の調査員を委託され、北米航路のコンテナ船に乗る。

北洋船団　女ドクター航海記

一九八五年十二月二〇日　第一刷発行
一九八六年八月二〇日　第八刷発行

定価　一、一〇〇円

著者　田村京子

発行者　堀内末男

発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一
電話　出版部（〇三）二三二八―二八四二
販売部（〇三）二三〇―六一七一
製作課（〇三）二三二八―二九六四

印刷所　共同印刷株式会社

検印廃止
乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

© 1985　K. TAMURA　Printed in Japan

ISBN4-08-775076-0　C0095

北洋船団　女ドクター航海記／目次

テープは投げられた　7
海へのあこがれ　16
「ケイソン」と「チョコマン」　25
わがいとしの明洋丸　37
制限だらけの北洋漁業　55
「三食昼寝、ドリンク付き」の神話　64
医療無線で女を上げる　79
紅一点　91
優雅なる母船生活　117

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

時化と濃霧の漁場　141
ソ連製バターの味　159
明洋丸診療日誌　172
船団長の「歯痛」　197
縁の下の力持ち　204
慰問袋　214
北洋アクション・レジャー　221
帰りたくない！　233

装丁　三村　淳

北洋船団　女ドクター航海記

テープは投げられた

私の未知への挑戦は、舷側より投げられる別れのテープとともに始まった。

昭和五十七年五月二十六日、午前十時半、仕立ておろしの船員服に身をかためた私を乗せ、九〇四〇トンの鮭鱒事業母船、明洋丸は、ゆっくりと函館港中央埠頭を離れていった。

この日、函館の街は篠つく雨に横なぐりの風が加わったさんざんな天気。東京あたりではもう半袖姿が目立ちはじめているというのに、ここ北国の港町は、ことに雨でも降ればまだコートにマフラーが欲しくなる気候である。ボート・デッキに立った私は、雨に煙る函館山をみつめながら、「これからだ、すべてはこれから始まるんだ」、と心の中で何度も自分自身に言い聞かせていた。

昭和五十七年度日本北洋漁業船団出港――北洋漁業基地として栄える函館の市民にとっては、思い思いののぼりや旗を立てて、次々と港を出てゆく一七二隻の独航船の船出や、それを見送ってからおもむろに岸壁を離れる母船の出港は、毎年見なれた年中行事にすぎないだろう。「ああ、

ことしもまた無事、ソ連との漁業交渉がまとまって、出漁にこぎつけることができたんだな」、と安堵するのがせいぜいだろう。

しかし、この五十七年五月二十六日という日は、私にとって生涯忘れられない日となったばかりでなく、わが国の遠洋漁業の歴史において、永く記念さるべき日となった。というのは、この日北洋船団に、はじめて女船医が誕生したからである。

女性の宇宙飛行士でさえすでに三人も誕生しているこのご時世に、たかが女の船医くらいのことで、それがいくら史上初のことであろうと、そうそう大さわぎに値するものではないはず。また、私自身も、女性の地位の向上だの、男の聖域を女性に解放するだのといった、勇壮なる志をもつウーマンリブの闘士であるわけでもない。私が栄誉ある女性船医第一号となってしまったのは、ただひとえに偶然と、私自身の性来のオッチョコチョイで後先を考えないヤジウマ的性格からきたものだろう。

「誰か二カ月ほど船に乗ってみる気のある者はいないか」

私の勤務する東邦大学病院麻酔科で緊急の医局幹部会議が招集され、その席上、主任教授から突然こんな相談をうけたのは、たしか四月の末ころのことだったと思う。大洋漁業から北洋船団への船医派遣依頼が、教授のもとに舞いこんだのである。

わが国の北洋漁業は、「母船式工船漁業」といい、解体や冷凍など一連の製造加工処理の設備をそなえた七〇〇〜一〇〇〇トン級の母船を中心に、運搬船、給油船、そして八〇〜一〇〇トン程度の独航船四十数隻によって編成された船団単位で行なわれている。個々の独航船が捕獲した魚は、母船に集められ、その場ですぐに加工製品化される、というしくみである。この辺の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

事情はまたのちに詳しくふれることになろうが、ともかく、このような編成を組む一船団は、乗組員合計が千人をこえる大世帯になるのがふつう。その中には必らず一人は医師を乗り組ませ、船団全員の健康管理に当らせることが義務づけられているのだ。ということは、裏がえしていうなら、船医がいなければ、どんなに他の条件はすべてととのっていようとも、その船団は出漁できなくなってしまうわけである。出漁中止は、千人の乗組員たちにとっては失業を意味するし、会社にとっては企業収益の大幅ダウンを招く。業界トップの大洋漁業の北洋船団が出漁見合わせに追い込まれた、などというニュースがもし流れたとしたら、不名誉この上ないはず。それも、もとをただせば、たった一人の医師が調達できなかったためなのである。

もちろん、現実には、そんな事態になることはまず考えられないだろう。しかし、今回の場合、かなり切羽つまっていたことは確かのようである。何せ予定していた船医に突然キャンセルされ、出港予定日を一カ月足らずのちにひかえ、いまだ船医が決まっていなかったのだから……。

どんなヤブでもロートルでもいい、ただ医者でさえあれば……、さすがそうハッキリとは口に出して言わないまでも、会社幹部の胸のうちは、そんなものだったにちがいない。会社からの船医派遣依頼にはただ〝年齢不問〟とのみ。

ところが、である。

それほど切羽つまっていながら、ただひとつ、

「男性の医師」をというのが親会社の腹づもりだったことはまちがいない。

ともかく、主任教授が医局幹部会の席上、「誰か——」といった時に、その対象に私が含まれていなかったことだけは確かなのである。

「夏の北洋はベタなぎ、船酔いは心配ないそうだよ。鏡のような海をすべってゆく船の上でのんびり昼寝。研究のグッド・アイデアだって浮かぶんじゃないかな。できれば俺が行きたいくらいだよ。どうだ、C君」

「……」

教授のあの手この手の勧誘にも、わが医局の男性陣営には寂として声なし。あまりに突然の、しかも船医というあまりに唐突な要請に、誰一人志願する者はなく、会議は終った。

一人のけ者にされ、いささかおかんむりだった会議メンバー中紅一点の私は、

「ふん、何が男性のみよ！」

「医者に変りがあるじゃなし……」

「男、女、の区別をつけていたら、医者の世界はつとまらないのに……」

などと、腹の中でつぶやいたものだけれど、それでもその時はまだ事は対岸の火事、まさか自分が行くことになろうなどと、これっぽっちも考えてみもしていなかったのである。

数日後、この件はもうすんだこととすっかり忘れていたところが、教授から呼び出しがかかった。

「君はいつだったか、船に乗りたいって言ってたことがあったね。いまでもその気はあるかい」

こういきなり言われて、ははん、例の件、まだ志願者があらわれないんだな、と察すると同時に、

「行きたい、行かせて下さい！」

と、自分でも思ってもみなかった返事が、口をついて出ていたのである。

後先考えず、とはまさにこのこと。それまで私は北洋漁業のなんたるかの認識は皆無に等しかったし、漁船の船医がどんな任務なのか考えてみたこともなかった。また、果して二カ月間も病院を留守にすることが可能かどうか、思いめぐらす余裕すらなしの即答だった。会議の席では他人ごととき流していたため、この時にはてっきり南極へ行く捕鯨船だとばかり思いこんでいたくらいなのである。

いくら私のこうしたオッチョコチョイの性格を熟知している教授とはいえ、事が事なだけにこの段階ではせいぜい、「二、三日考えさせて下さい」程度の答えを期待していたのにちがいない。それを、まだ本題を切り出さぬさきに、決定的なOKの返事が返ってきてしまったものだから、急に心配になってきたものとみえる。

「本当にいいのかい。サケ・マス漁の北洋だよ。例のアッツ、キスカの先まで行って魚とるんだよ。客船じゃないんだよ。荒くれ男ばかりの世界に、女は君一人なんだよ。……それでもいいのかね」

こんどはまるで引きとめんばかりの口調なのである。ちなみに、私の記憶する限り、教授が私のことを一人前の「女」として扱ってくれたのは、これがはじめてのことであった。

ともあれ、いったん言い出したからには引き下っては女がすたる、とばかりに、

「大丈夫です。是非行かせて下さい」

と言い放ってはみたものの、最初の興奮がさめてやや落ちつきをとりもどしてくると、本心、やはり心配な気持ちがこみあげてくるのは否めなかった。

「そういえば、会社側の希望では、男性に限る、ということのようでしたけど……」

「うん、そりゃまあ、その……それが望ましい、ということであって、女性ではならぬというほどの強い、その、あれではないのではないかと……まあその辺はぼくの方で何とか、ね。いや、それにしても助かったよ、ようやくこれで本麻酔科の面目が立つというものだ。でも本当にいいのかねェ」

こうして私の北洋行きは決まった――と少なくともその時点で私は思っていた。しかし、実はあとできけば、私の申し出は会社側を仰天させ、かつ深刻なパニックにおとし入れたものらしい。「半世紀を越える北洋漁業の歴史において、いまだかつて女性が乗船したケースはない。できれば男性医師を――」

という強硬な反対論が各方面から出され、担当の船員課長は文字通りの東奔西走、席のあたたまる間なく船医さがしにかけまわったのだが、期日も迫っていることゆえ、どうしても適当な男性医師をさがし出すことができなかったのだ、ということである。そうしてタイムリミットぎりぎり、ついに初の女性船医受け入れに踏み切らざるを得なくなったという次第。何のことはない、「出漁取りやめよりはまし」との判断で、「やむなく女医で間に合わせた」のが真相だったわけだ。

知らぬがホトケ。私はそんなこととは露知らず、教授に即答した時点でもうすっかり船に乗ることが決まったつもりでいたのだが、その後、船員課長氏の努力がみのって、一人でも物好きな男性医師が首をタテにふっていたとしたら、私の一大決心はついに闇から闇へと葬られてしまうところだったのである。

正式に私の乗船が決まったのは、出港のわずか二十日ほど前。満面笑みどころか、「笑み」がはみ出しこぼれ落ちそうなエビス顔で、教授に三拝九拝していた船員課長の姿は、いまだに忘れ

られない。

函館山は早くも雨雲ととけ合って、かすんでしまった。

改めて制服姿の我が身を省みる。

濃紺のサージに金ボタンと袖口の二本の赤筋——これが船医の印に他ならない——が映えて、我ながら凛々しい船医の正装ではある。

まったく、馬子にも衣裳、とはよく言ったものだ。

ふと何気なくさぐる上衣のポケットに、何やら硬いものが——あれ、これは昨夜泊った函館のホテルのルームキーではないか。

前夜、ジーパン姿でチェックインしたえたいの知れない女性が、翌朝には突然スマートなセーラーウーマンに変身してチェックアウトしたものだから、フロントマンもあっけにとられ、キーの返還を要求するのを忘れてしまったものとみえる。

おかげでこのキーは、その後何十日か、明洋丸の医務室で、ときにはカルテをおさえる文鎮として、またあるときにはカンのフタをこじあけるヘラとして、大いに役立ってくれながら、私と北洋の旅の苦楽をともにすることとなったのである。

制服といえば、これを手に入れるまでにはひと悶着があった。

私としては、船に乗るからには、当然船員服が支給されるもの、と思いこんでいたのだが、会社の船員課に言うと、かえってけげんな顔をされてしまった。

「え、そんなもの着るんですか。今までの船医の方にも、一度も支給したことなんかありません

よ」

憧れの船員服を「そんなもの」とはあんまりではないか。ここでひるんではならじと、必死に食い下り、初航海に当って制服は身も心も引きしめるために何としても必要な品であることをる説明、ついに誂えてもらうことに成功したのである。それも、出発が五月で帰港は八月になるから、その理由で夏服、冬服を各一着ずつ——。

船員課長としてみれば、こんなことでヘソを曲げられ、せっかく確保した船医にまた逃げられてしまっては一大事と、いい加減のところで妥協してくれたのにちがいない。

渋々作ってくれたこの制服が、(船員課長は、私に強要された、と思っているかもしれない)、のちに会社のためにも偉大なる働きをすることになった。

デッキから見下ろす海面は、雨空をうつして黒ずみ、鈍く光っている。

夏の北洋はベタなぎで鏡のようだ、と異口同音に言っていた会社の人たちの甘い言葉は果して本当なのだろうか。患者を診るより先に、自分の方が船酔いでダウンしてしまうのでは……、持病の喘息が出たらどうしよう。眠れるかしら……。

さまざまな思いが頭の中をかけめぐる。

やはり最大の心配の種は船酔いだが、船医の経験のある、ある先輩医師の話では、下関で乗船した某船医が、あまりにひどい船酔いのため、神戸で早々とリタイアしてしまい、船会社の人たちをあわてさせた、ということもあったそうである。

もし私がそんなことになったら、乗組員の人たちはもちろん、会社の人たち、医局の同僚たちにも合わせる顔がない。新調の船医の正装だって泣くだろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com